

私は自分のホームページ上に「奇妙な」シリーズを掲載中である。作品は第六弾目というべきであるが、出版は四冊目を数えることになる。近著『奇妙な失踪者』も、幻冬舎ルネッサンスにお世話になっての長編ミステリーである。

前著『奇妙な受精卵』のモチーフは、人の命の重さに係る「誕生死と体外受精の生」である。読者が以下の感想文を寄せている。

昨今は多様な人生観、結婚観があり、その出生の戸籍上の不備をマスコミが取上げて、行政が追認する云々が日々報道されている。

本著はそれらの事象をサスペンス風に書き上げた小説であり、元技術屋ならではの科学的な史実に基づく内容であるが、真実との境界はミステリアスである点が読者を強く惹き付ける。

「種の保存」は人、動物、全ての生物に係る基本的な営みであるが、体外受精、代理母等々、自然界に挑戦する最近の医学について詳細な調査の上での記述に驚嘆した。

怪しげな出生の秘密を持つ医師宇崎雅夫を再登場させ、研究のために卵子を提供した母親、生命とは、愛とは、その廻る因果とは何か？

非科学的な部分を科学的史実で結び付けた所に本書の特徴がある。自然界の動植物の誕生は神秘的であるが、最近の医学は手を加えて更に複雑化させると警鐘したいのか？（後略）

中国の田舎街、招遠市にて

生命の誕生に係る最近の生殖補助医療の進歩

は著しく、産めない女性に福音となった。反面大きな課題や怖さを残した。

もしも見知らぬ人が、自分と同じ遺伝子を持っているとしたら。自分が「試験管ベビー」だったら。「産みの母」と実際の「母」は、果してどちらが本当の自分の母なのか？もし恋に落ちた相手が姉弟だったら。ゾツとする恐怖がある。今起りつつあるホラー。そんな時代に警鐘を鳴らすべく執筆した『奇妙な受精卵』は、ミステリーでもありホラー小説となった。

この度の『奇妙な失踪者』の主モチーフは、「養蚕業が何故斜陽となったのか？」である。サブ・モチーフは、国を捨て故郷を捨てねばならなかった人々の「望郷の念」である。

前著『奇妙な受精卵』の登場人物、妊娠した阿久津絵美を敢えて『奇妙な失踪者』にも再登場させ、暗示した恐怖の結末を占ってみせる。過って日本の絹は基幹産業であった。

横浜港から世界に輸出され外貨を稼いだ。国土開発や軍艦建造費すら絹の外貨で賄った。海のシルクロードが形成されたらと、列強諸国が羨やんだ日本の絹文化があった。話は、主人公「羽田善」羽田野与一とおぼしき遺体が、余呉湖に漂うミステリアスな光景から始まる。

謎の華僑人が、新宿歌舞伎町に滞在する導入部で先ず舞台が整う。推理小説の形態を採って、邦楽絃をつくる滋賀県木之本町と、金沢のホテル倒産劇の背後に、絹にまつわる不思議な事件が発生する。金沢加賀毎日の小林記者が事件の共通の謎を嗅ぎ付ける。背後には、実は恐るべき日本養蚕業潰しの罠が横たわっていた。

日本の繁栄の裏、また著しい中国の経済発展

の影に蠢く国際的な闇『負の遺産』の実態を解明してみせる。行政官庁等専門家の方々から反論覚悟で、その原因分析を試みた作品である。

中国の経済発展の背景に、企業を定年退職し、あるいは退職させられノウハウを持っていた人々が中国に渡り、そうした人々の知恵が、巧みに活かされてきた経緯を、行政官庁や企業経営者は気付いているだろうか。頭脳流出は、かつての製糸養蚕業のみならずあらゆる産業、現在の自動車工業においてもなお続いている。

小説を書くようになって、文献・資料を集める調査作業と平行し、取材にできる機会が多くなった。

最近はネット検索により、一次情報の文献検索がパソコンで手軽にできる。だが、集めた資料やネット情報で満足できなくなると、描きたい人物が生き舞台を、実際に自分の眼で確かめるために現地に赴いてから執筆するようになっている。

高校時代の友人から誘われて、取材先と一緒に歩きモチーフを新たに膨らませたこともある。取材先から思わぬ紹介を得て、現地に行ってみることも少なくない。短編なら取材せず空想を膨らませて、まとめることも可能なのだが、長編はそうは行かない。執筆する際は、綿密な資料集めとこうした取材活動を再構成する作業が必須となる。

六月一日(金) 渋谷BUKAMURAオーチャードホール最上の三階席、私は家内と二人でいた。

目的は、ザ・チーフタンズの東京公演を聴くためである。座員の一人トリーナ・マーシャル嬢のアイリッシュハーブを聴くためである。

女性は、拙著「奇妙な」シリーズの第六弾『奇妙な失踪者』(650枚)の登場人物、琵琶奏者のマック蘭星、そのモデルとなったトーマス・

マーシャル(芸名蘭城)氏の妹さんなのである。

ケンブリッジ大の元パイプオルガン奏者だった蘭城氏が、英国のエリートコースを投げ出して、日本の琵琶奏者に何故成ったのか？何故日本の伝統文化の琵琶に惹かれたか？そして天蚕の絃に何故固執したのか？は本に譲りたい。氏のインタビュ取材は昨年秋、群馬県藤岡の喫茶店だったが、その際は来年六月来日すると教えてくれた。

その時は、トーマス蘭城氏は、愛蘭の音楽一家に育ったのだから位にしか思わなかった。

インタビュー取材の場合、便利な小型のICレコーダーを何時も持参し、インタビューに許可を得て録音させてもらう。会社勤めの時代は仕事で客と面談しても、簡単な手帖メモ書きだけで、会社に戻ってから記憶を頼りに報告が書けた。今や加齢による記憶力の衰えはどうしようもなく、ICレコーダーに頼ることにしている。

妹さんは日本・愛蘭外交樹立五十周年記念行事の一環として、ザ・チーフタンズのメンバーのハーブ奏者として来日。一行はアイリッシュダンスと演奏の、リアダン(Liadán)という女性のみのパンド六名、キイボード、ステップ・ダンスを踊るキャラ&ピラツキ兄弟、総勢十数名編成である。

日本人共演者に、和太鼓奏者として海外公演も豊富な林英哲、奄美大島出身で節回しに特徴のある元ちとせが加わるという豪華な顔ぶれである。

ザ・チーフタンズ(The Chieftans)というバンドが、国際的な愛蘭のバンドであること、妹さんが2003年からそのバンドのハーブ専属奏者であること、琵琶奏者トーマス蘭城氏を取材するまでは、私は全く愛蘭情報に疎かった。

バンドは、ケルト民族の流れを汲み、愛蘭・トランド・フォークの創始者的な存在だと音楽評論

家の評価は高い。一年の大半を世界ツアーに費やし、四十枚以上のアルバムを発表。グラミー賞六回、アカデミー賞受賞、六二年結成、今年で四十五周年を迎え、愛蘭の切手にもなった国宝級のバンドで、政府から公式音楽大使に任命されている。

来日公演は、六年振り二回目であるという。

そんな民族音楽を奏でる人気バンドとは露知らず、チケットは簡単に手に入るだろうとたか括つた。東京での公演は人気沸騰し、二回あるようだが幸い初日公演のチケットをやっと手にいれた。

バンドはその後全国七会場を廻るといふ。

公演全席指定一枚七・八千円。決して安いチケットではない。一ヶ月前の申込で、入手できたのはホール最上階の三階席で、天井敷だった。

開演は十九時だったが、少し遅れて始まった。

天井敷敷から見下ろすような愛蘭ミュージックの真髓、歌有り、ダンスあり、笑いありの正に興奮の坩堝である。ステージ全面の特別の床を蹴るダンスは凄かった。熱狂して皆手拍子を打つ。

男性の珍しい楽器(úinéar a'pá, tin whistle)、タンギングを連続させるフルートの熱演、一番後方でバンドのリズムを支える打楽器(bodhrán)に加わる日本の和太鼓奏者の腹を揺るがす音が、会場を一挙に押し包む。時に哀愁を込めた静寂、ハーブとフィドル(fiddle)、そして笛の共演。一見ステージ上の叔父さん叔母さんしか見えない彼らに、楽器を手にした途端愛蘭魂が乗移っていた。

ザ・チーフタンズと初コラボ、元ちとせの抑揚の効いた歌声が会場に響く。過去ザ・チーフタンズと共演したミュージシャンは、ポール・マッカトニー、ヴァン・モリソン、ローリング・ストーンズ等で錚々たる顔ぶれ。日本人としてはセツシヨ

ン初、元ちとせがダブリンのウィンドミルレーン

採録の「ムニャムニャシューラルー」は、耳新しく正に奄美の島唄と愛蘭伝統民謡曲の見事な出会いを堪能。伴奏に、元ちとせのデビュー当時から楽曲を提供したという、ギターリストが加わる。

家内は、片時も双眼鏡を手放さなかった。

最後は凄かった。ステップダンスの三人が、ステージから降りて会場内の観客を誘い、手をつなぎ踊りの輪が次第に拡がっていく。一体化した群舞が会場を廻り、今度はステージに駆け登っていく。演奏者と観客が一体になって舞台上は、正に日本・愛蘭親善の輪が開いていたのである。

休憩時間ピツフェに、沢山愛蘭人が屯していた。彼らは、久し振りに日本で望郷の音色を感じたであろう。私も黒いギネスビールを飲んだ。後日自宅のネット検索で、映画「タイタニック」

の哀愁を帯びた独特の笛の音や船倉パーティの曲が、アイリッシュサウンドであると知った。

愛蘭という日本同様の島国の殺戮・迫害の歴史、映画「タイタニック」にも描かれた船倉

に乗船して米国に渡るうとした愛蘭人の群れ。

映画の船倉パーティ場面の曲、世界的ヒットの主題歌セリーヌ・ディオンの歌、随所に流れる哀愁を帯びたフルートの音色とも異なる独特のアイリッシュ・サウンドの笛の音は記憶に新しい。ザ・チーフタンズのバンドリーダーが吹く笛の音色こそが、ブリキ素材のティン・ウィツスル(Tin Whistle)と呼ばれる楽器である。

『奇妙な失踪者』で描いた登場人物マックラン星の琵琶の音色は、アイリッシュ・サウンドの匂いがするといったら言い過だろうか？天蚕絃を張る平家琵琶に、「金色蚕姫」の導きで蘭星は母国の興趣に辿り着いたような気がする。

翌二日(土)、同窓会の支部総会があった。



年一回開催される恒例行事である。会場は大宮の東晶大飯店で、支部役員にとつては馴染みの店である。席上、私が何故物書きの所業を続けるようになったのかを語れということ、「六十歳にして小説家を目指す・・・」との題を与えられ人前で話をする機会があった。

支部会報にも、恥を忍んで駆け出し著実業の実態を綴り、売れない物書きの現状を参加者の前で披瀝せよとの幹事からの要請である。

話の内容はと言えば時間も延びし、もつとメリハリの利いた話にすれば良かったと反省しきりであったが、工学部出身の物書きの姿に参加者が一様に興味を抱いたようであった。

一週間後九日(土)、「ふれあいウォーキング」と称する「加治丘陵の森林浴と茶畑を訪ねる旅」支部恒例第十九回目の行事に私は参加していた。

年四回程度実施し、毎回十名程度の参加者がある人気イベントで、私は毎朝近所の公園でジョギング・ウォーキングとラジオ体操を日課にしていたので、『奇妙な失踪者』執筆も一段落していたので気軽に応じることができた。

加治丘陵の旅とは、入間市北部標高百数十mの丘陵の旧サイクリングコースの里山歩きで、仏子駅出発、桜山展望台、茶畑公園、入間市博物館を経てバスで入間駅に戻る約7kmである。

桜山展望台から金子台に広がる茶畑、秩父・多摩の山並み、富士山や関東平野等のパノラマを楽しめるはずであるが、生憎と天候わるく富士山は望めなかつたものの、持参の弁当を食べながら素晴らしい光景を満喫することができた。

最後の入間市博物館は、平成五年約四億の費用で開設された別名「お茶の博物館」である。時間が無く、詳細に見学できなかったが結構

楽しめた。展示はお茶一辺倒と思っていたが、アケボノ像の足跡化石や、入間市の自然環境や地、歴史に関するコーナーがあった。執筆の關係から養蚕業に関する展示に目が行った。

入間郡には、近世後期には飯能絹、川越絹、越谷絹といった絹織物を生産する地域が部分的にあった。郡下には当然その原料の養蚕業が営まれていたが、主体は飽くまで製茶、縞木綿の生産が主体であったようだ。武州秩父地方に比べて、入間郡の養蚕業は、寺竹村で繭の生産があるようであるが、地域にも自ずと限界があるようである。蚕種を信州の小県郡から仕入れていた記録があるという。蚕種販路に興味がある。信州の小県郡が蚕種の先進地であったのは、明治時代の記録を調べても頷ける。

当時上州の甘楽社、高山社、島村の田島弥平などの蚕種開発が日本で最も盛んだたはずだが、入間郡が上州でなく何故信州の小県郡の蚕種を購入していたのか興味深い。秩父の絹は、上州藤岡との交流があつたと聞くが、同じ武州でも蚕種の流通経路が異なつていたようである。

本作品執筆動機は、平成十八年十月九日群馬県藤岡市の菩提寺で琵琶の演奏会と、寺に保存されてきた「金色蚕姫絵図」ご開帳が同時にあると聞き、私は惹かれて家内と共に参加したことにあ

る。琵琶演奏者は、藤岡に住む愛蘭人のトーマス蘭城氏と、「上州天蚕(てんそう)復活」を目論む映画監督で世話人である前橋の櫻井氏の二人であった。光明寺の「金色蚕姫」蚕の女神を日本の養蚕業調査の突破口に、文献を調査すべく有楽町蚕糸会館の資料室に何度も通う羽目になった。

琵琶奏者の蘭城氏と映像演出家の櫻井氏には、会場で後日インタビュー取材を申し入れた。来

日群馬県で出会った日本文化の琵琶の音色に痛く惹かれて優れた琵琶奏者になる。然も、桐生絃作りの名人高岡俊太郎に依頼して天蚕の絃を復活し、平安時代の音色を本邦初で復活しようと試みる奇妙な愛蘭人なのである。最初題名『奇妙な琵琶法師』を考えた。失踪者として国を捨てる華僑人や愛蘭人の共通の心情を汲んで題名『奇妙な失踪者』とした所以である。

今回も一部ノンフィクション的手法を随所に盛込んだ。作中の登場人物や場面に実際と似た個所が仮にあつたとしても、全て作者の創造の産物であることは断るまでもない。

『奇妙な失踪者』購入の紀伊国屋系列の書店及びネットの方々、配本図書館で読んでくれた好書家の方々、誌面を借りてお礼を申上げる。地元ダンス仲間やスポーツ倶楽部友人、高校同窓のアンクルさん、孤狼凜さん他の方々、朝のラジオ体操諸先輩、蜻蛉の諸姉兄にお礼をいいたい。

農水省から来られた蚕糸会館西田紀子さんには、大日本蚕糸会の資料室で大変お世話になった。会社の体験談は重要なヒントになった。光明寺佐光慈豊住職、映像演出家の櫻井眞樹氏、愛蘭のトーマス・チャールズ・マーシャル(日本名蘭城)氏、富岡市役所元助役の寺崎喜三氏、インタビュー取材させて戴いた四氏には特にご協力戴いた。再度お礼を申し上げここに感謝したい。

(株)冬社ルネサンスの営業部長兼同ブックスのプロデューサー田村尚弘氏と編集スタッフの方々、表紙イラストの平野里見さんに無理をお願いし大変お世話になった。

最後に、時間の観念無く起床する私の小説や随想の執筆を容認して、諸事万端支援してくれた家内にも併せて感謝したい。